

令和元年度

## 第30回 教育実践発表会

### 自立と共生をめざす確かな学びの追究

～新しい時代に必要となる資質・能力と豊かな心を培うための授業づくり～



国語

道徳

特別支援教育

帯広市立啓北小学校

## 1 はじめに

### 夢と志を持ち、自分の可能性に挑戦し続ける子どもの育成

校長 塩田直之

2030年には、少子高齢化が更に進行し、65歳以上の割合は総人口の3割に達する一方、生産年齢人口は総人口の約58%にまで減少すると見込まれています。

また、子どもたちが将来就くことになる職業の在り方についても、子どもたちの65%は、将来、今は存在していない職業に就くとの予測や、今後10年～20年程度で半数近くの仕事が自動化される可能性が高いなどの予測があります。

さらに、2030年頃には第4次産業革命ともいわれるIoTやビッグデータ、AI等をはじめする技術革新が一層進展し、社会や生活を大きく変える超スマート社会(Society5.0)の到来が予想されています。

このように複雑で予測困難な社会であるからこそ、社会の変化を前向きに受け止め、人間ならではの感性を働かせて、社会や人生、生活をより豊かなものにするとともに、複雑化・多様化した現代社会の課題に対して、主体的な学びや多様な人々との協働を通じて、課題の解決を図ることが求められています。

これらのことから、北海道教育推進計画に明記されている「自立」と「共生」を合い言葉にしながら、校内研究と日常実践を通して、新しい時代に必要となる資質・能力を身に付け、夢と志を持って、自分の可能性に挑戦し続ける子どもを育成することが重要であると考えています。

結びになりますが、本校の研究に対して、忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げますとともに、本校の研究の推進に当たり、多大なるご指導・ご助言を賜りました北海道教育庁十勝教育局並びに帯広市教育委員会の皆様、本校の教育活動の推進に当たり、多大なるお力添えを賜っております関係の皆様により感謝申し上げます。

## 2 研究主題について

### 1 令和元年度教育活動の重点と主題の設定

本校では、学校教育目標を「心豊かにたくましく生きる子どもを育てる」とし、「心身ともに健康な子ども」・「社会性を身につけ助け合う子ども」・「主体的に学習できる子ども」の育成を目指している。また、学校経営の基本方針を「大きく変化する社会においてもたくましく生きる子どもの育成」とし、知・徳・体のバランスを意識した教育活動の展開を行っている。

「大きく変化する社会においてもたくましく生きる子どもの育成」とは、〈新しい時代に必要となる資質・能力〉、〈豊かな心〉、〈健やかな体〉を育成することであり、これらの力の育成には、自分の価値に気づき、自分を一つ上の自分へと高めるため、自ら学ぼうとする姿(自立)と、児童が他者及び社会と積極的にいかかわろうとする姿(共生)、が必要になると考える。

そこで「自立した学びを身につけ、学び合い成長し合い共によりよく生活していく」という視点から、研究主題を「**自立と共生をめざす確かな学びの追究**」と設定した。

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と質の高い授業の継続を通して、自立した確かな学びのできる子ども、学び合い・成長し合い、共によりよく生活できる子どもの育成を目指し、より深い研究に努めていきたい。

### 2 副題について

副題を～新しい時代に必要となる資質・能力と豊かな心を培うための授業づくり～とした。

**新しい時代に必要となる資質・能力**とは、生きて働く知識・技能の習得、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力、学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養など、学びにかかわる多様な力とし、これらの力を身に付けることで、「学びの自立」を培うことを目指していきたい。

**豊かな心**は、思いやりや優しさ、きまりを守る大切さなど、一人一人の子どもたちが今後豊かな生活を送るために、培ってほしい心である。授業や日常の学校生活の中で、学び合い・成長し合い、時に助け合いながら、共によりよく生活するためには、子ども一人一人にこの豊かな心を培うことが大切と考え、副題とした。



### 3 研究構造図



### 4 国語の研究

#### 研究の柱 I：授業スタイルの定着

##### 視点① 授業作りの手順を明確にした授業スタイルの定着

これまでの啓北小学校が積み重ねてきた国語科の授業作りの手順を明確にし、「授業作りのベースク」とした。全校で授業作りの方向性を統一して実践にあたっていく。

##### 1 教材に合った指導事項の設定

学習指導要領の指導事項全てではなく、「重点化」してねらいを絞る。

例「段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えること。」  
→「理由と考えの段落を、叙述を基に区別して捉えること。」

##### 2 指導事項に合ったパフォーマンス課題の設定

- ・「教師モデル」を作成し、指導事項と合っているか、どんな指導が必要か確認する。
- ・指導事項に合ったパフォーマンス課題の「ルーブリック（評価基準）」を作成する。



##### よりよいパフォーマンス課題チェックリスト

- ☆ クラスの子どもたちができることか？（表現形式は既習事項のものが望ましい）
- ☆ 表現した成果物を評価してくれる他者（担任以外）を位置づけたか？
- ☆ 指導計画の時間の中で完成するものか？

##### 3 単元の指導計画の作成

段階	単元	1 単位時間
「つかむ」	・パフォーマンス課題モデルの提示 ・学習計画を立てる（目標の共有） ・全文通読 ・大体の内容をつかむ	・パフォーマンス課題や目標の確認 ・課題の把握 ・学習活動の見通しの共有
「ふかめる」	・パフォーマンス課題を意識した思考・判断・表現の学習活動	・自分で読み取り、考えをもつ ・読み取ったことを深め合う ・まとめ
「つながる」	・学習してきたことのみまとめ（パフォーマンス課題の取組や交流）	・次時への計画 ・ふりかえり（パフォーマンス課題への取組）

単元計画表を作成し、教室への掲示や児童への配布ができるように準備する。

##### 4 ルーブリックに合わせた評価

**教師モデル**

**ルーブリック**

A…「始め・中・終わり」の3つの段落構成で、教材文に載っている3つの絵文字の特長に照らし合わせながら身のまわりにある絵文字について説明し、自分の感想を交えた文章を書くことができる。

B…「始め・中・終わり」の3つの段落構成で、身のまわりにある絵文字について説明する文章を書くことができる。

C…例示の文を真似しながら、身のまわりにある絵文字について説明する文章を書くことができる。

「教師モデル」の作成により、児童も教師も学習の目的への見通しをもつ。  
単元終了後には、成果物をルーブリックに合わせて評価する。  
単元の途中でもルーブリックを意識することで指導のふりかえりや改善、支援の計画を立てることができる。

## 視点② 重点を明確にした授業スタイルの確立

今年度は、単位時間の授業の質を高めるために、発達段階における授業の重点やそのための手だてを明確にした。

授業作りの重点表

	重点	手だてのポイント
つかむ 低学年	<b>何を学ぶかを明確にする</b> ・単元計画や前時との関連を意識する。 ・パフォーマンス課題の取組を意識する。 ・本時の学習活動の見直しを明確にする。	・学習計画を生かして ・課題の言葉やシンプルに ・何をしたらよいかわかる課題設定
ふかめる 中学年	<b>学習活動を明確にする</b> ・時間配分をはっきりさせる。 ・答えよりも根拠を大切に。 ・ノートへの書き方を明確にする。	・根拠をもたせて ・やることはシンプルに
ふかめる ～つながる 高学年	<b>学びを振り返る力を高める</b> ・わかったこととわからなかったことを意識できるようにする。 ・自分の考えの変容とそのきっかけを意識できるようにする。	・自分の言葉で書く ・授業の中キーワード（学習用語）を意識して ・様々な教材での積み重ね

## 研究の柱Ⅱ：つながりが実感できる授業

### 視点③ 対話の質が向上する学び

対話の質が向上する学びを実現させるために、今年度、下の表の充実期に重点を置いて実践を積み重ねていく。その際には、「他者にかかわる対話」を大切に、下の図のような考えの広がりやつながりを意図的に指導していく。

〈交流場面での積極的な指導・評価の視点〉

	訓練期（話す回数を増やそう）	充実期（話しやすさを感じよう）	自立期（自他の成長を認め合おう）
ペア学習	・答えの確認 ・話（先生・友達）の再現 ・書いてあるものを読む	・教える、教わる ・自分の考えを伝える ・質問をする	・意見を創り出す ・相づちをしながら ・納得度合いを伝える
グループ学習	・相づちを意識する ・順序を決めて話す	・意見の相違に気付く ・結論をまとめる （多数の意見にまとめる）	・質問をする ・結論をまとめる （根拠の相違を整理する）
全体交流	・返事と体の向き ・主語をはっきり話す ・聞かれたことを正しく ・最後まではっきり話す	・発表への反応 ・言い換える発言 ・頭括型の話形	・話し合いのゴールを意識してつなげる ・話し合いをふりかえる



## 5 道徳の研究

### 研究の柱Ⅰ：授業スタイルの定着

#### 視点① 主題追究型の授業づくり

主題追究型授業は、児童が主題を自分の問題として捉え、資料を基に主題を追究し、主題について自分の生活と結び付けて考えることで、自分の生活の中で実現していこうとする思いや願いを深める授業である。これを実現するために、「つかむ」「ふかめる」「つながる」の各段階において主題を明確に示しながら授業を展開する。

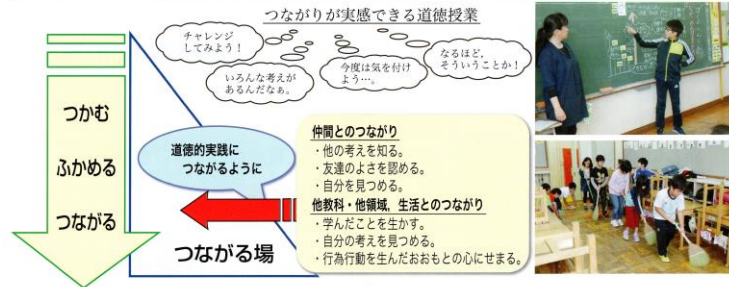
	授業の流れ	ノートの活用
つかむ	① 主題についての現在の受け止めを知る。 ② 主題を追究するための問題意識をもつ。	<p>授業の最初と最後では、必ず自分の考えを記入する。</p>
ふかめる	(資料提示) ③ 場面発問や主題発問で主題を自分のこととして追究する。 ④ 導入の問いについて、さらに深く主題を追究する。 (中心発問)	
つながる	⑤ 学習を振り返り、自分と結びつけながら主題について考える。	





**視点② 仲間、他教科・他領域、生活とのつながりが実感できる学び**

自己の生き方についての考えを深めるためには、学習の中で児童が仲間、他教科・他領域、生活とのつながりを実感する必要がある。つながりを実感することで、児童は主題を自分のこととして捉え、主体的に考え始めると考える。そのため、授業展開のどの段階においても、仲間、他教科・他領域、生活とのつながりが実感できる授業を目指していく。



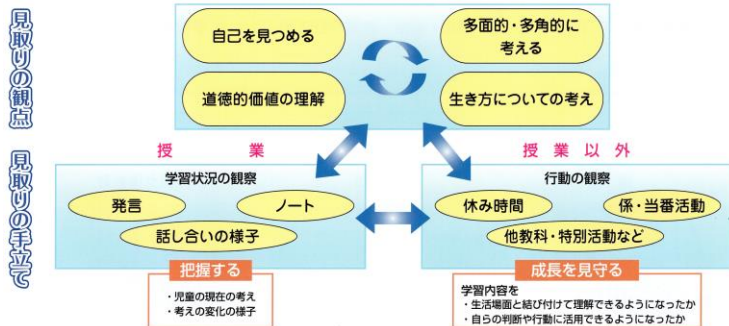
**視点③ 見取りの観点を明確にした評価**

見取りの観点を明確にして、児童と向き合うことで正確に児童の実態を把握することができる。児童が授業を通して、道徳的価値について考え、道徳性を成長させているかどうかを見取ることが大切であり、その変化や成長を捉え、評価に生かしていく。

**見取りの観点 3つのポイント**

- ① 学習する道徳的価値を理解しているか  
例：「○○とは…だと思ふ。」「○○することは難しい」「○○は大切だと感じた。」
- ② 物事を多面的・多角的に考えているか  
例：「○○は…だけではない。」「でも、少し違う気がする。例えば…」「Aさんの考えは…」
- ③ 自己の生き方について考えをより深めているか  
例：「これから○○してみたい。」「私はこの間、○○をしたけど…」「私の場合は…」

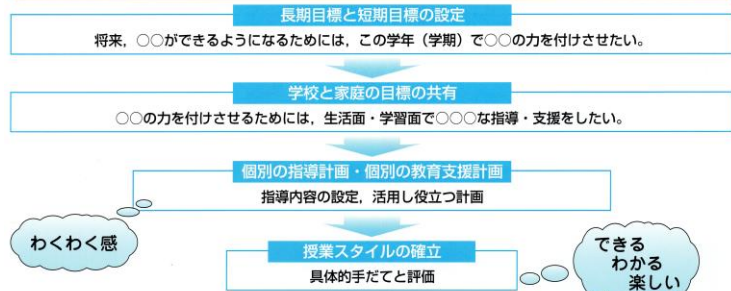
**見取りの観点を明確にした評価方法**



**6 特別支援教育の研究**

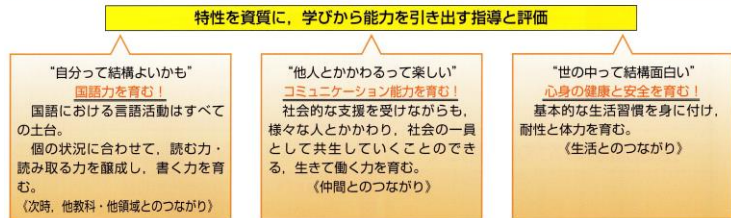
**研究の柱Ⅰ：授業スタイルの定着**

**視点① 児童一人一人の教育的課題をつかみ、個別の指導計画に基づいた段階的指導内容の設定**



**研究の柱Ⅱ：つながりが実感できる授業**

**視点② 指導と評価を一体化させ、仲間と、他教科・他領域、生活とのつながりが実感できる学びや活動の提供**



**特別支援教育のイメージ**

